

## Feeling in America

博士後期課程 3年 長澤 多代

「アメリカについて研究するなら、アメリカの空気を肌で感じてきなさい。」これは博士後期課程に進学するとき、先生方から受けた言葉である。修士論文でアメリカの大学教育と図書館の関係をテーマとしながら、それまで一度もアメリカに行ったことがなかった。その後も、この言葉をどこかに感じながら研究を続けていたが、行く機会を見つけれずにいた。幸いにも、図書館情報大学振興会の2001年度海外研究助成金を受けて、その機会を得ることができた。今回は、そこで感じたアメリカの空気について報告したい。

### 1. スケジュール

調査の日程は、2002年3月2日から21日までの約18日間である。前半（2日－9日）はEastern Michigan UniversityのあるYpsilanti（イプシランティ）に、後半（10日－20日）はUniversity of MichiganのあるAnn Arbor（アナーバー）に滞在した。YpsilantiとAnn Arborは車で20分ほどの距離にある。Ann Arbor滞在中にも何度かYpsilantiを訪れた。

調査の目的は、アメリカの大学では、授業と図書館がどのような関係にあるのかを見ることにあった。特に、学生や教員が授業の中で図書館をどのように利用しているのか、図書館が授業計画に必要なTeaching Tipsを教員にどのように提供しているのか知りたかった。調査の方法は、授業を参与観察し、教員と学生に情報利用についてインタビューするとともに、教員を対象とする情報利用関係のワークショップを参与観察し、担当者にインタビューすることにあ

った。調査の依頼はすべて電子メールで行なった。だが、授業の参与観察を依頼した教員からの返信はほとんどなく、再送しても同じ結果に終わった。ワークショップの担当者からは快諾を得た。ミシガン滞在中に、このことを授業に参加させてくれた教員に漏らすと、「教員は誰だって授業を見られたくないんだ。多分、何度送っても返事は来ないと思うよ。」と、当然のように言われた。教員の閉鎖性と私の依頼状のどちらかが問題だったのかここでは問わないが、このような理由で、今回の調査は、情報利用関係のワークショップの参与観察と担当者へのインタビューが中心になった。報告の内容もこれに焦点をあてることにする。

### 2. Eastern Michigan University

Eastern Michigan University (EMU) は、Ypsilantiという小さな田舎街にあるTeaching Universityである。教員には、教育者としての役割が強く求められている。図書館員は全員が教授職にある。地元出身の学生が多く、成績不良や経済的な問題を抱える学生も少なくない。Ypsilantiには、いわゆる低所得者層が多い。近年、宅地が造成され、公共図書館や郵便局が整備されている。

#### 2.1 教員支援システム

EMUの主な教員支援組織には、Faculty Center for Instructional Excellence (FCIE)、Center for Computing Instructive (CIC)、Center for Research Support (CRS)、中央図書館 (Bruce T. Halle Library) がある。これらの事務室は全て中央図書館の1階に

あるため、部局間の交流が図りやすくなっている。今回は、情報利用関係のワークショップを企画・運営しているCICと中央図書館を中心に調査した。

CICは15年にわたって、ワークショップを企画・提供したり、ニューズレターを刊行したり、教員にアドバイスしながら、教員の教育活動を支援してきた。CICのワークショップは、初心者レベルから上級者レベルまで幅広く用意されている。1,2時間規模のワークショップが週当たり3つほどある。スケジュールはCICとFCIE、CRSが共同で発行するニューズレター『Faculty Commons』やホームページに掲載されている。主なプログラムには、マイクロソフト社のソフト（Word, Excel, Access and Power Point）、Dreamweaver、電子メールの操作法、授業で利用できる情報資源の紹介がある。ワークショップを担当するのは、主として、CIC職員や図書館員であり、両者が協同する場合もある。原則的に参加費は無料だが、夏季には有料（1000ドル）の1週間集中型のワークショップも用意され、2001年には学内の教員20名が参加している。

上記のフォーマルな活動と並行して、図書館員が教員をコーヒーや昼食に誘い、話の中でそれとなく「情報利用ガイダンス」を行なうというインフォーマルな活動もある。これは偶然を装って図書館にいる（普段から狙いをつけている）教員に声をかけて、図書館内のカフェに行き、取り留めのない話から始めて、「そういえば、あなたの授業を受けている学生が指定図書を使いにくいと言っていましたよ。」などの形で、少しずつ問題に切り込んでいくという方略である。これを聞いた時には「教員ハンティング」と大笑いしたが、担当者のお話では、「一対一のざっくばらんな話し合いが一番効果的である。」ということだった。

## 2.2 FDワークショップ

私が参加したワークショップは、「Resources for Teaching E-literacy」と「Microsoft Word」だった。前者は図書館員が担当し、後者はCIC職員が担当した。両プログラムともに参加者は1名だった。担当者の弁明によれば、「今回はプログラムの揭示が遅かったために」参加者が少ないが、いつもはたくさんいるということだった。

「Resources for Teaching E-literacy」では、授業で利用できそうな情報資源について、図書館員が自分で作成したリンク集を用いて解説した。特に強調されたのは、学生に「インターネットを使ってはいけない」と言わないこと、インターネット上の情報と文献で得られる情報の違いを学生に説明する必要があることだった。途中で、参加者が専門とするフランス文学関係のサイトも紹介された。プログラムの最大の目的は、学生のインターネット利用に対する教員の理解を深めることにあったようだ。担当者は、普段からインターネットをあまり利用していない教員に、その有用性をくり返し説明していた。

「Microsoft Word」では、初心者レベルの操作上の秘訣（tricks）が紹介された。コピー&ペースト、字下げの方法、画像の加工と文書への挿入方法などが解説された。操作はすべて、担当者が示した例に参加者が準じる方式で進められた。私も参加者になって作業をした。簡単な操作だったが、思わぬ秘訣を知ることにもなり、説明を受けることで迷うことなく作業ができた。参加した教員はWordをほとんど操作したことがなく、大発見の連続だったようだ。「ワークショップに参加してよかった。」と何度も言っていた。

どちらのワークショップも、授業の中でインターネットがどのように活用できるのか、授業用資料を作成するためにソフトをどのように活用したらいいのかなど、授業

との関係が強調されていた。

### 2.3 EMU閑談

図書館員の方から、「日本の図書館の現状について話を聞きたい。」という要望を受けたために、日本の高等教育の構造、大学図書館のサービス体制、図書館員と教員の関係について発表した。発表内容のうち、特に驚かれたこととして、「国立大学では、資料費のほとんどが教員の研究室図書として使われること」、「私立大学では、図書館員として採用されても、数年後にしばしば他の部局に異動させられること」があった。発表後には、8人の参加者から「日本でも図書館員は女性が多いのか?」、「図書館情報学を専攻する大学院生の修了後の進路は?」、その他、生涯学習の場としての公共図書館の役割など日本の図書館に関する全体的な質問を受けた。ディスカッションの中で、日米の図書館員の扱われ方が異なること、その理由は図書館員が専門職として認められているかどうかにあることが浮かび上がってきた。発表の準備段階から緊張の連続だったが、日本について知りたいという参加者の温かい雰囲気の中で進めることができ、充実した1時間となった。

## 3. University of Michigan

University of Michigan (UM) は、Ann Arborという大学町にあるResearch Universityで、ハイスクールの成績の上位15%以内の学生が進学する州内でもトップクラスの大学である。教員は研究者としての意識が高く、図書館員は教授職をもたないが、専門職としての地位を確立している。Ann Arborには、教育熱心ないわゆるホワイトカラーが多く、市民の高校卒業率は全米の中でも格段に高い。

### 3.1 教員支援システム

UMには、Teaching and Technology

Collaborative (TTC) という、教員が新しい情報技術を用いて授業や研究ができるように支援する学内組織がある。TTCは次の部局から構成されている。

図書館 (Undergraduate Library, Graduate Library)

Center for Research on Learning and Teaching (CRLT)

Faculty Exploratory

IT Education Services

Knowledge Navigation Center (KNC)

Learning Resource Center (LRC)

Language Resource Center

Media Union

Science Learning Center

各部局は、UMの教員に必要なプログラムを企画・提供している。TTC全体では、毎年5月に、1週間にわたって様々なプログラムを提供する「Enriching Scholarship」が開催されている。今回の調査では、CRLT, Faculty Exploratoryが主催するワークショップに参加した。このうちCRLTワークショップは大学院生を対象としていたために、ここではFaculty Exploratoryのワークショップについて報告する。

### 3.2 FDワークショップ

私が参加したFaculty Exploratoryワークショップのうち、図書館員が担当するのは、「Working with Charts in Microsoft Office」と「Digital Technology for Field Research」だった。参加者は、前者が7名、後者が1名だった。

「Working with Charts in Microsoft Office」では、Excelを使って表の作成と加工をした。全くの初心者を対象としているため、「年寄りには難しすぎる」と繰り返す初老の教員、矢継ぎ早に質問する教員がいた。担当者は受講者の対応に追われながらも、3名のアシスタントとともに、簡単な表の作成からホームページやPower Point画面への表の挿

入までを手際よく解説・指導した。私も参加者として作業したが、説明&実習が細かいユニットで構成されていたこと、アシスタントが手際よくサポートしてくれたことで、無理なく作業についていくことができた。

「Digital Technology for Field Research」では、情報収集に役立つデジタル機器として、レコーダー、デジタルカメラ、ビデオなど録音・録画関係の機器の種類と用途、その効用と限界について説明があった。

機器の入手情報を記載するホームページも紹介している。参加者が画像の編集について知りたいと言ったために、図書館員に代わって、急遽依頼を受けたKNC職員がPhotoshopとスキャナの操作法について解説した。

UMが提供するワークショップの目的は教育と研究の両方を支援することにある。だが、EMUと比べて、「学会で発表する時には」、「論文を作成する準備として」など、研究との関係が強調されていた。

### 3.3 UM閑談

Ann Arborでは、Michigan LeagueというUMが所有するキャンパス内のホテルに滞在した。そのフロント係はUMの学生アルバイトである。そこで、この学生（社会学系の2年生）に、授業で指定された文献の入手法についてインタビューしてみた。これによって、この学生が、図書館よりもブックショップ（教材販売店）をよく利用すること、図書館には授業用の文献が一冊しかなく、貸出時間の制約（2時間）があって利用しにくいと感じていることなど、文献では得られない貴重な情報を得ることができた。また、ミシガン州の大規模大学を中心とする古本市がインターネット上で公開されていることを教えてくれた。



1) EMU中央図書館 (Outside0304 -1.jpg)

EMUの卒業生であるBruce T.Halleの寄付を受けて1998年に新設された。

翌日、彼女がよく利用するというブックショップに行ってみた。それまでも数軒のブックショップを訪れていたが、彼女が説明した「自分でコピーをとる」ものではなかった。このブックショップでは、学生が履修科目名を言って原本を受け取り、自分でコピーするシステムになっている。私には履修科目がないので、店長に「私は日本の学生で、アメリカの高等教育について勉強したいので、コースパック（授業用テキスト集）をコピーさせて欲しい。」と頼み、何とか了承を得た。そのお蔭で、学生と同じ手続きでコースパックを手に入れることができ、学生の教材入手の一端を体験することができた。

### まとめ

ミシガンという限られた地域であるが、Teaching UniversityとResearch Universityそれぞれの凡その特徴を捉えることができたように思う。印象的だったのは、教員を対象とする初心者レベルのワークショップの中で、参加者の一人一人がきめ細やかな対応を受けていることだった。ある図書館員は、「教員は、コンピュータ操作に苦労しているが、自分が研修を受けていることを学生に知られたくない。研修をするにも、学生とは別の機会や設備を用意する必要がある。」と言っていた。ここから、現在、盛んに議

論されている教員の資質向上 (Faculty Development) のプログラムに情報利用に関する基本レベルのワークショップを設けたり、教員が参加しやすい環境を整備することが重要であることを強く感じた。

今回の調査では、図書館員が教員の情報利用をワークショップなどによって支援している現状を見ることができた。その中で、授業や図書館に対する考えの違いについて新たに気付かされた点も多くあり、これこそがアメリカの空気を肌で感じるのだと思った。上記の他にも、英語クラスにおける図書館利用教育、図書館員のミーティング、授業準備のための図書館員と教員の打ち合わせ、大学院生を対象とするティーチング・セミナーなどに参加する機会を得た。今後は、調査の成果をふまえて、日米の大学における授業と図書館の関係について分析を深めたい。

最後に、今回の調査で重宝した機器について紹介したい。私が携帯したのは、ICレコーダー (SONY: ICD-MS500) とデジタルカメラ (SONY: DSC-P5) である。どちらもメモリ・スティックで管理するもので、入力データを次々にコンピュータにダウンロードさせることができ、入力データの量を気にすることなく調査できた。特に後者は、短時間の動画 (2分30秒以内) が撮れるために、フラッシュやシャッター音が気になる場所でも、周囲に気づかれずに手軽に撮影できたことがよかった。

## 謝 辞

調査の内容上、インタビューをした方々の個人名を公表することはできませんが、EMU、UMともに多くの図書館員、教員、学生の方々にご協力いただきました。特に、EMU図書館のLisa Klopherさん、UMアジア・ライブラリーのKenji Nikiさんには、調査のための重要な手がかりをいただきました。図書館情報大学の宇陀則彦先生、坂本

昭裕先生には、UMやミシガンに関する情報をいただきました。図書館情報大学の関係者の方々には、応募から報告にいたるまで一方ならぬお世話をいただきました。皆様方のお陰で、このような貴重な機会を得ることができました。心よりお礼申し上げます。

